あとがき

本書は、絵画と交流した時間的な場として、一九八九年から四年足らずの、私が最初にモスクワに駐在した時期を中心に扱っているが、現代ロシア絵画の社会性意味付けを考察した時代背景は、プーチン大統領代行誕生直前の一九九九年十二月頃までになっている。時代背景がその時期で終っているのは、本書の基本的な原稿をその頃までに書き上げたためである。その時間的な区切りがどこで終っているのかを明らかにしておくことは、現代ロシア絵画の本質的な特徴を本書の構成に従って起承転結風に述べた私自身の考察の結論から言って、必要不可欠なことであろう。その後のプーチン政権が、ソ連崩壊に至る過程を含め十年あまりにわたるロシアの政治経済混迷を収束させ、それまでの時代の流れに一線を画した感があるので、なおさらのことと思われる。プーチン大統領の安定政権の下で、今後十年ぐらいのスパンで考えた場合、絵画作品にそれまでとは異なる新しい時代の思潮や世相を反映した絵画傾向が出てくることも考えられるからである。

本書の構想は、一九九八年四月に二度目のモスクワ駐在をする半年ほど前に練り上げ、駐在する前のその半年間に原稿の七割近くは下書きを終えていたのであるが、ロシア社会をより深く見通すことを可能にした二度目のモスクワ駐在がなかったならば、本書の完成を見ることはなかったであろうと感じている。脱稿後も二度目のモスクワ駐在が続いていたことから、本書を世に出すのも遅れることになったが、本書の完成が二度目の駐在のお陰であることを思えば、それもやむを得なかったであろう。

ところで、二〇〇一年の夏に日本に一時帰国した際、たまたま訪れた実家近くの市立図書館で全二十八巻からなる「世界美術全集・西洋美術編」（小学館）を現実に目にし、そのような美術全集が発行されていたことを知った。一九九三年より九七年にかけて刊行されたその膨大な量の美術全集の一部で近代ロシア絵画が取り上げられている。西洋美術史の様式の流れに沿って各テーマが総合網羅的に一巻ごとに編纂された全体的な構成からすれば、側面から補完的に取り扱われたものであるが、一九七〇年代から八〇年代にかけて日本にロシア絵画を紹介した某画廊の商活動が､それなりに残した足跡を見る思いであった。その美術全集は、図書館に行けばいつでも閲覧出来るという点で、ロシア絵画が日の目を見ないという日本の状況に一石を投じたものと言えるであろう。私もその意味でその美術全集を大いに評価している。近代ロシア絵画についてはその美術全集により広範に解説されているので、参考にして頂ければと思う。

最初のモスクワ駐在を終えて日本に帰国した後のロシア絵画についての日本の出版状況は、従って、当初私が感じていたのとは若干違ったものであったということになるが、私がその美術全集の存在をその出版当初から知っていたとしても、やはり本書は書かれていたことであろう。ただし、その執筆動機は、次の一石を投じるという意味合いになったと思われる。ロシア絵画も、その懐の深さから言って、とても数冊の書物で総てが言い尽くされるものでないのは言わずもがなである。そうした書物やアルバムの少なさからして、日本におけるロシア絵画の注目度は、まだまだ正当なレベルからひどくかけ離れたものに

なっている。今後もさらなる一石を投じるような本が続くことを期待したい。

巻頭の序文は、ソ連人民芸術家であるP・P・オソーフスキー画伯にお願いした。彼の作品はトレチャコフ美術館だけで四十点以上も所蔵されており、ロシアの美術館全体では八百点近くの作品が納められているという。書評を特に彼にお願いした理由は、画伯がロシア画壇の第一人者の一人ということにも勿論あったわけであるが、それと同時に彼がフルシチョフ時代の一九六〇年代初めに「厳格なスタイル」と呼ばれる画風で話題を集めた画家の一人であったためである。

「厳格なスタイル」とは、芸術家もその例外ではなく、時の権力者に迎合するのが当たり前の風潮であったその時代に、大変な勇気をもって姑息な世渡りを自ら排し、ただ実力のみで絵画芸術の道を切り拓いたほんの一握りの画家の画風やその姿勢を指している。画伯の作品は、本書にも掲載されているが(図版36)、その作品の簡潔明快な画風にそのような、虚飾を嫌う一徹で実直な彼の人柄がよく現われている。それゆえ、そのまっすぐな人柄を見込んで、歯に衣着せぬ書評を期待してのことであった。

しかし、それは自作に自信があったからというよりも、ロシアの一流の画家が本書をどう見るかということを知りたいという気持が強かったからで、実際書評をお願いしに行く時には、拙著が画伯の批評に値するものであるかとの一抹の不安に、震えるような緊張を実感したものである。ともあれ、訪問して判ったことは、画伯が七十七歳の高齢にもかかわらず、かくしゃくと旺盛な創作を続けておられ、その時も近く行われる個展のための追い込みをされているところであった。ロシア語に翻訳した拙稿をお持ちしてその二日後にはもう書評が出来上がっているという異例の早さで、それを取り次いでくれた友人の画家から聞き及んだ話では、私にとって大変嬉しい驚きであったが、画伯は拙稿を大いに気に入られ、一気に読んで翌朝にはひらめくように書評を書き上げられたとのことである。画伯の書評は、言うまでもなく、私に自信と大きな励ましを与えてくれた。この紙面を借りて、改めてオソーフスキー画伯に心からの感謝の念を表したい。

本書の出版に当たっては、二回目の駐在時にモスクワ日本人会に頼まれて「ロシア絵画について」という演題で講演を行っているが、その講演原稿を付録として収めることにした。本書との重複箇所もあるにはあるが、ロシア絵画の理解に役立つ事柄が新たにその講演原稿には盛り込まれており、相互補完的な位置付けにあるので、併読頂ければと思う。

二〇〇五年 四月

石井徳男